

The Spoils of Poynton

にみる ‘Scenic Method’

藤野早苗

1. 劇作の失敗から奮起するジェイムズ

1890年から95年までの5年間ヘンリー・ジェイムズ (Henry James) は短編は書いているものの、長編は一切書かずに、劇作に専念する。しかし上演されたのは小説『アメリカ人』(*The American*, 1877) を劇化したもの (*The American: A Comedy in Four Acts*, 1891) と、『ガイ・ドンヴィル』(*Guy Domville*, 1895) の2作だけであった。前者は地方巡業のあとロンドンで70回上演され、まずまずの結果であったが、ジェイムズが絶対の自信をもっていた後者は無残な失敗であった。ジェイムズはその理由をひとえにイギリス人観客の低俗性に帰しているが⁽¹⁾、『ガイ・ドンヴィル』の失敗により、彼は劇に見切りをつけることができ、「本来の形式」である「小説」に戻る決心がついたものと思われる⁽²⁾。

2月14日の「ノート」(*The Complete Notebooks of Henry James*) には5年間の劇作に費やした時間を無駄にせず、小説に生かす決意を示す次のような記述がある。「この無駄にした情熱と浪費した時間の一部は貴重なレッスンだったのであり、とても回りくどい、残酷なほど代価の高いやり方で、‘divine principle of scenario’ が、小説にも極めて有効であることを私に教えてくれたのではないだろうか・・・私が ‘divine principle of scenario’ と称するものは劇にも小説にも通用する鍵である。」⁽³⁾ (115) ここに述べられている決意のごとく、ジェイムズはこの後劇作の経験を生かした ‘scenic method’ を小説作法に取り入れていくのである。

その試みが顕著にあらわれた小説が、95年5月から取り掛かり、96年の4月から10月にかけて *Atlantic Monthly* に連載された *The Spoils of Poynton* である。この作品についてはジェイズとしては異例なことに7回にわたって「ノート」に、創作過程を示す詳細な記述がある。そのことに注目して、それがジェイズの小説技法の転換を示すものであること、つまりそれ以前の作品と比較して、ジェイズの小説が dramatic になったことをウィーゼンファース (Joseph Wiesenfarth) は *Henry James and the Dramatic Analogy* のなかで指摘している。しかし「ノート」の記述が実際の小説にどのように展開されているのか検証はされていない。

またニーナ・ベーム (Nina Baym) は “Fleda Vetch and the Plot of *The Spoils of Poynton*” において、「ノート」の7回に及ぶ記述はプロットの進行上生じた問題を何とか解決すべく、ジェイズが苦心した箇所を示しているが、それが実際の小説に反映されているわけではないとしている。つまり「ノート」はジェイズの創作過程の記録として価値あるものであるが、出来上がった作品を説明するものにはなっていないという見方である。しかし、*The Spoils of Poynton* が劇作の経験を小説に生かすべく、ジェイズが意気込んで取り組んだ最初の作品と見るならば、この「ノート」の詳細な記述はジェイズの真摯な取り組みのプロセスを示すものに他ならない。そして7回の記述はまさにジェイズの ‘scenic method’ の鍵となる scene についての詳細な説明である。本稿はまず「ノート」の記述の要点をたどり、次にそれが小説にどのように生かされているかを分析することにより、ジェイズの「ノート」の記述はこの作品理解のために極めて有効であることを明らかにする。それにより、劇作の経験を小説に取り入れた ‘scenic method’ がジェイズの小説にどのような変化をもたらすものであるのかも見えてくるであろう。

2. ‘divine principle of scenario’ による小説の構想 「ノート」の記述

The Spoils の基となったのはあるディナーの席でジェイズが耳にした話であるということだ。最初の記述がみられる93年12月24日の「ノート」に

次のように書かれている。

One of these was related to me last night at dinner at Lady Lindsay's, by Mrs. Anstruther-Thompson. It is a small and ugly matter—but there is distinctly in it. I should judge, the subject of a little social and psychological picture.(79)

話の内容はスコットランドのある富裕な青年地主が亡くなった父親から貴重な名品を数多く蔵している家を相続した。その家は彼の母親が特別の思い入れを持って設え、大切にしてきたものだった。しかしイギリスの慣習に従い、彼女はその家を名品ごと息子に譲って、別の寡婦用住居へ去らねばならない。息子は結婚し、妻とともにその家に行ってみると、名品はことごとく母親によって運び出されていた。彼と妻は猛烈に抗議し、母親との間で醜い骨肉の争いとなった。とどのつまり母親は息子が亡くなった父親の息子ではないと告白したというものである。ジェームズはこの話が醜悪であると記しているが、それでも何か物語の主題となりうるものをそこに感知していたのだ。この時点でジェームズが考えているのは前記の引用にみられるように従来 of 彼の小説の特徴である 'a little social and psychological picture' であることに注意を向けておく必要がある。なぜなら、18ヶ月後には彼の構想に顕著な変化が見られるからである。

同日の記述にはさらに主題について構想をねり、夫人が亡き夫とともに長い間名品を蒐集し、大切に守ってきたこと、息子の妻はまるで趣味の異なる俗悪な家庭の娘であることを物語の状況と設定し、そんな女性に家や名品をゆだねなければならない夫人の苦悩を主題とすることが記されている。そしてその主題に基づき、プロットを発展させ、夫人が息子の妻にしたいと願う、美への情熱を持った女性がいること、しかし息子はまるでその女性には興味を示さず、母親からみればおぞましいほど低俗な女性に夢中であることなどが書かれている。このプロットを追っていくと、いかにも *The portrait of a Lady* (1881) に続くような 'a little social and psychological picture'

が出来上がりそうである。しかしその後、この物語についての記述はしばらく途絶え、次に言及されるのは18ヶ月後の95年5月13日のことである。

95年の2月の「ノート」には劇作の経験を小説に生かす決意が記されていることはすでにみてきたが、ジェームズがその決意を早速実行に移していることが、5月13日の *The Spoils* についての2度目の記述から明らかである。93年の最初の構想においてはジェームズはこの作品を ‘a little social and psychological picture’ (強調、筆者) と考えていたのだが、2度目の言及においては drama (強調、筆者) として考えていることが顕著になる。

ジェームズは最初の構想を読み直し、‘full roundness for the action’ が足りないこと、つまり ‘the completeness of the drama-quality’ が欠けていると書いている。ここにジェームズの新たな関心を見て取ることができる。つまり、ジェームズのなかで、小説を ‘a little social and psychological picture’ とすることで飽きたらず、これから取り組むべき小説の構想を劇の発想で進めていく意図が明確になったことがわかる。そして以後、彼はその意図を実践に移していくのである。

そもそも ‘divine principle of scenario’ とは何を意味するのであろうか。単なるプロットの構想であるならば、何も目新しいわけではない。ここで Oxford Dictionary で scenario の意味を調べてみると、‘A sketch or outline of the plot of a play, ballet, novel etc, with details of the scenes and situations’ とある。つまり、ジェームズが scenario を小説に取り入れるというとき、単なるプロットではなく、具体的に一つ一つのシーンを想像し、組み合わせ、発展させていくことを意味しているのではないだろうか。「ノート」にはジェームズのそのような発想が克明に記されている。

小説に劇を重ね合わせ、この小説を ‘3 acts play’ と考えたジェームズはまずそれぞれの Act における action を考えるのだが、ジェームズの意味する action とは個々の動きの意味ではなく、「物語の本筋をなす一連の出来事」の意味である⁽⁴⁾。

3度目の記述はそれから3ヶ月後の8月11日である。すでに原稿を70枚書いたこと、*Atlantic* に限定されている枚数は残り150枚なので、「簡潔」にし

なければならぬことが、冒頭に記されている。そして、そのためには劇作の経験を生かして、物語の流れのなかで必要と思われる scene をまず考え出し、それらがうまく当てはまるように、間違いのない順序でつなぎ合わせていくことが有効であると考えていることを次のように述べている。

What I feel more and more that I must arrive at, with these things, is the adequate and regular practice of some such economy of clear summarization as will *give* me from point to point, each of my steps, stages, tints, shades, every main joint and hinge, in its place, of my subject--give me, in a word, my clear order and expressed sequence. I can then *take* from the table, successively, each fitted or fitting piece of my little mosaic.(127)

ここでジェームズは一片、一片をきちんと当てはめることでモザイクが完成されることになぞらえ、必要な scene を然るべきところにきちんと当てはめていくことで、物語が完成されていくことを語っているのである。その場合、一つの scene でも、当てはめる場所を間違えば、その作品は完成しないことになる。従って、“clear order and expressed sequence” がきわめて重要になるのである。

4度目の記述は3ヵ月後の10月15日である。まずこの作品が30,000語を超える膨大なものになりそうだと書きながら、そのことは大して気にならない様子で、それよりも、貧弱な主題をしっかりとした立派なものに仕上げるのができそうだという自信あふれる筆致でその理由を説明している。ジェームズにそのような自信を持たせたのはフリーダの生かし方に閃きがあったからである。そしてその閃きは action を詰めていくプロセスで、生まれたものなのだ。

Ricks にジェレス夫人を訪れたフリーダは、夫人によって名品が Poynton からことごとく運び出され、移されているのを見てショックを受ける。そして彼女の心に複雑な動きが起こるのだ。フリーダがオウエンをひそかに恋し

ていることはジェームズはもともと想定していたのだが、オウエンの側にも同種の感情を沸き立たせることをここで思いついたのである。それにより両者の関係がインパクトのあるものになり、フリーダのジェレス夫人への対応も微妙な陰影に富んだものになる。「ノート」には実際にそれがどのように展開されるかについての詳細なシナリオが記されているが、それは小説の章を中心に展開されているので、次のセクションで分析したい。

重要なことはフリーダが物語の中心的存在になったことである。それはまさに画期的なことであろう。なぜなら、これにより、ジェームズがディナーの席で耳にした逸話が見事にフリーダの内面のドラマへと発展していくことになるからである。しかも、フリーダの扱い方の変更は行き詰って苦慮した結果ではなく、action を考える過程で、いかにして dramatic に展開させるかを考えていく中から生じたものであることに、ジェームズの満足感が窺えるのである。

5 番目の記述は翌1896年の2月13日である。すでに3分の2は書き終えていて、結末についてのプロットの骨子を次のように書いている 「ジェレス夫人は名品を送り返す。オウエンとモナは結婚する。その後、家は火事になり、フリーダの目の前で焼け落ちる」(155)。このようにプロットの “bare facts” ははっきりしているのだが、“If I can from this point on only clarify this to the SCENIC intensity, brevity, beauty make it march as straight as a pure dramatic action I shall, I think, really score. (157)” というジェームズの言葉にみられるように、これらの “bare facts” をいかに dramatic に展開させていくかに、ジェームズの神経は研ぎ澄まされていく。

ここでもジェームズは要となる scene を考える。それはフリーダがロンドンでオウエンと会う場面であり、“*une scene de passion*” (156) でなければならぬとしている。つまり、スティックに自分を抑えていたフリーダが遂にオウエンに自分の感情を吐露し、その上で、絶対にモナを裏切らないことを彼に約束させるのだ。この scene がうまくいけば、“the real and innermost mechanism of my end” (156) がみえてくるとして、ジェームズは逸

る心を抑えがたいかのように、この場面での二人の会話まで「ノート」に記しているが、これは実際の小説の方がはるかに洗練されたものになっているので、この scene が展開される 章の分析のなかで、取り上げたい。

1896年2月19日の6番目の記述ではもう一度このオウエンとフリーダの scene を取り上げている。これはまさに要の scene であり、“une scene de passion” でなければならないことは前述のとおりだが、大切なことはこの scene 自体の展開の仕方と同様、いかにそれを導くかも含め、“a close little march of cause and effect” (158) が必要であるとして、ジェームズがきわめて慎重に検討していることがわかる。何はともあれ、作者が介入しすぎないように、“IT MUST BE AS STRAIGHT AS A PLAY” (159) と特に強調しているところに、劇作の経験を生かすことで、狙い通りの効果が出せると信じるジェームズの思い入れが読み取れる。

この大詰めのレストランでの scene は2章に分け、最初の章はモナの母親 (Mrs. Brigstock) の登場で終わり、次に夫人とのやりとりについて、ごく簡潔な説明の章をはさんで、その後二人の気持ちの高まる scene をもってくれば、この scene が説得力あるものになることをジェームズは確信できた様子である。

最後の記述は1896年3月30日のことである。残りの枚数も限られてきているなかで、ジェレス夫人が名品を Poynton に送り返したことと、その理由を知ったフリーダの喪失感、夫人への告白、はじめて真に理解しあう二人の状況を短い4章を使い、二人の間だけで展開させていくことを確認して終わっている。

このように7回にわたる「ノート」の記述は物語の基となった逸話の説明から始まり、それを dramatic に発展させて、小説を完成させていくプロセスを記した興味深い、貴重な記録である。ジェームズが最新の注意を払ったのは scene のしっかりした組み立てにより、action を展開させていくことである。そのためにはいくつかの key scenes が重要であることが、それらの scene のメカニズムについての詳細な説明から読み取れる。そこで次に、ジェームズが特にこだわりを見せている 章と 章を中心に、

ジェイズの意図したことが実際に小説でどのように描き出されているのか分析してみたい。

3 . Key scenes - その1 : , 章

The Spoils の基となったのはディナーの席で耳にしたある夫人の逸話であることから、小説も逸話と同様の状況にあるジェレス夫人の描写から始まる。しかし最初からジェイズが逸話とは別の、自分の物語を始めていることは、ジェレス夫人が死守したい貴重な品々を表現するのに 'spoils' という単語を使っていることから明らかである。「ノート」の逸話の記述に使用している 'valuable things' (79) と比較して、spoils には初めから備わっていたのではなく、「努力して、格闘して、獲得した物」というニュアンスがある。“her personal gift, the genius, the passion, the patience of the collector—a patience, an almost infernal cunning” (13) によって蓄積したものだけに、それを無条件に譲り渡さねばならない夫人の無念さは読者に十分伝わってくる。しかも、夫人が我慢ならないのは息子が結婚するだろう相手が趣味の悪い成金のブリッグストック家の娘モナであることだ。そこで夫人は偶々出会った、上品で、自分と趣味があうと確信できる娘フリーダを家に招き、オウエンと結婚させることを画策する。こうして物語の状況が設定され、進行していくのである。従って最初の3分の1ほどはジェレス夫人を中心に展開していき、説明的な描写が多い。これはジェレス夫人の強いこだわりがこの物語の重要な要素であることを考えれば当然のことであろう。

しかし scene がまったく無いわけではない。章の短い scene は、ジェレス夫人のセリフのみが長く、会話といえるかどうか、疑問ではあるが、「ノート」の3度目の記述でも言及されているとおり、物語の dramatic な展開の前提となる重要な scene である。その scene はモナが母親とともにジェレス家を訪れ、一泊した翌朝のこと、オウエンと夫人との間の会話である。夫人が “Well, my dear boy, what *does* your friend there make of our odds and ends?” とたずねると、オウエンからは “Oh she thinks they're all right!” という簡単な答えが戻ってくる。さらに一息入れてから “Has she

any sort of feeling for nice old things?” と問いかけると、“Oh of course she likes everything that’s nice,” という答えである。その場に居合わせたフリーダと同様、読者にもジェレス夫人の心が目に見えるようである。そこで夫人の長いセリフが始まる。“I could give up everything without a pang, I think, to a person I could trust, I could respect.” (30) と言い、夫人は自分にとって蒐集品は宗教であり、生そのもの、自分という存在を意味するものであることを熱心に語る。そして最後に、“Who’d save *them* for me - I ask you who would?” と言ってフリーダの方を向き、“You would, of course--only you, in all the world, because you know, you feel as I do myself, what’s good and true and pure.” (32) と語り掛け、フリーダになれば自分に代わって蒐集品の管理を任せたい意思を明示する。この scene はジェレス夫人の意思をはっきりと読者が知ったばかりでなく、フリーダの面前でオウエンにもそれが示されたこと、それによりフリーダがどんな立場になるか、読者に印象づけることにもなる。ジェレス夫人の長いセリフは彼女がここで吐露した思いこそ、物語の展開を方向づける重要な意味をもつことを示している。同時に、それと対照的なオウエンの短いセリフは彼の単純さばかりでなく、その短い言葉の中に表れるモナの教養のなさまで表現していて、ジェレス夫人の思いが説得力をもつ。

物語はジェレス夫人が蒐集品を Poynton から運び出し、Ricks の自分に与えられた家に移したことにより、新しい展開をみせることになる。このことについてはジェームズが「ノート」の4度目の記述で、フリーダが物語の中心的存在になったこと、それにより逸話がまさに dramatic な物語になることを興奮気味に語っている。「ノート」に詳細に説明されている展開はほとんどそのままに 章の scene に映し出されている。

ところでジェームズの ‘scenic method’ は会話による ‘scene’ と、‘picture’ とよばれる narrative による説明の部分から構成されている。このことについてはウィーゼンファースの次の説明がわかりやすいだろう。

The typical scene treats in dialogue, interpersonally and objectively

those thoughts and opinions, facts and probabilities that can find an outward expression; the picture typically treats those thoughts, emotions, and desires not easily expressed in conversation and also those actions and situations which press in upon and affect the consciousness. (35)

つまり、scene と picture は互いに補い合うもので、scene が有効であるためには、それを準備する picture が信頼できるものでなければならない。ジェームズが *The Spoils* の展開のなかで画期的な場面と考える 章が説得力をもつのは、その前の章で、状況の説明とフリーダの微妙な心の動きが十分に描き出されているからである。ジェレス夫人の招きにより Ricks を訪れたフリーダはそこが Poynton の蒐集品で隅々まで飾り付けられているのを見て、愕然とする。極めて満足げな夫人に抱き寄せられ、共感を求められているのは分かって、どうしても同調することはできない。フリーダのために美しい品々で飾った寝室を用意されても、喜ぶ気になれない。本質的美を求めるフリーダには所有にこだわる夫人の行為は盗みとしか思えず、不正な手段によって持ち出された蒐集品に美を感じることはできないのだ。そればかりか、オウエンを裏切ったような気がして、恥ずかしさと同情と怒りが次々にこみ上げてくる。そして自分の立場が数時間のうちに、どうしようもなく不実なものになったことを感じるのである。このフリーダの心の動きは 章の scene の基調となる。つまり、もともとジェレス夫人に同質の感性を持った人として気に入られ、当然夫人の側に立っているはずのフリーダが、もう一緒にはいられないと思うようになったのだ。このような前提があつてこそ、 章のオウエンとの会話が理解できるものとなる。

Ricks を訪れたオウエンと話をするフリーダは夫人の立場を弁護するものと、夫人からは期待されているのだが、夫人に同調していないし、擁護することもできないことを明らかにするのだ。

次にフリーダに促されて話すオウエンの言葉から、モナの強硬な態度が伝えられる。モナは蒐集品の価値を認めるがゆえに欲するのではなく、Poynton

ton の家に備わっていたものだからジェレス夫人が運び出したのは絶対に許せないという態度であるようだ。モナとその両親は法的手段に訴えることまでオウエンに迫っているらしい。そして蒐集品が完全に返還されるまで、結婚は延期されていることが次の会話から明らかになる。

“It’s a little uncertain. The date (of marriage) isn’t quite fixed.”

“Oh I thought I remembered that at Poynton you had told me a day and that it was near at hand.”

I dare say I did; it was for the nineteenth. But we’ve altered that she wants to shift it.” He looked out of the window; then he said: “In fact it won’t come off till Mummy has come round.

“Come round?”

“Put the place as it was.” (92)

「ノート」にはこの情報の伝達がこの scene の climax であると記されている。なぜなら、返還されなければ結婚はありえないことをフリーダは知るわけで、それはジェレス夫人にとって朗報であるばかりか、密かにオウエンに想いをよせているフリーダにとっても好機を招く可能性を感知したことを意味するからである。小説では、“at Ricks the only thing she could do was to accept it with the dumb exaltation that she felt rising.” という説明文でフリーダの心境を表現している。だがオウエンに対するフリーダはきわめて冷静で、“What you wish me to say from you then to your mother is that you demand immediate and practically complete restitution?” (93) と言って、自分の役目は蒐集品の完全な返還をジェレス夫人に促すことであると認識していることを明確にする。

フリーダの心中は複雑である。オウエンと話しているうちに、彼自身は貪欲ではないし、母の行為を憤慨しているわけですらなく、ただモナに支配されて行動していることがわかるのだ。そんなモナになぜ？という疑問が起きるのだが、そのような思いは抑え、オウエンが紳士的に生きる助けをしよう

と決意する。これは「ノート」に記されている次のようなジェームズの倫理観に基づく action である。“If I want *beauty* for her—*beauty* of action and poetry of effect, I can only, I think, find it just there; find it in making her heroic. To *be* heroic,. To achieve beauty and poetry, she must conceal from him what she feels.” (134)

一方、ジェレス夫人との争いも恐れず、果敢に説得することを約束してくれるフリーダに感じ入ったらしいオウエンは彼女に対する想いを告白する。「ノート」にはオウエンから熱い想いを告白させることにより、二人の間に緊迫感が生まれ、dramatic な効果が出せるねらいが記されている。このオウエンの告白があってから、フリーダの内面の動きが急に活発になるのがわかる。実際にオウエンが口にしたわけではないのに、“With everything patched up at the other place I could live here (at Ricks) with *you*. Don't you see what I mean?” (101) と言っているように感じたりするのだ。オウエンの告白を読者は目にしているので、フリーダの昂ぶる心にも自然についていける。そしてフリーダの昂ぶる心があればこそ、“There's one thing I dare say I ought to tell you, if you're going so kindly to act for me; though of course you'll see for yourself it's a thing it won't do to tell *her*.” (102) というオウエンの言葉に隠された真意、つまり「蒐集品を戻さなければモナは結婚しないことを母に話してください」というメッセージを彼女が読み取ることを読者は理解できるのだ。このように 'scenic method' は読者を物語の展開そのものに引き込みながら、dramatic な効果を高めていくのである。

このように 章ではフリーダの立場が大きく変わった。それまでのジェレス夫人に追随する立場から、どの登場人物よりも多く必要な情報を得て、その情報を自分の倫理観に照らし合わせながら操作できる立場になったのだ。しかもそこに彼女自身の想いが交錯するゆえに、極めて複雑な内面のドラマを展開させることになるのである。

章は 章を補足する、フリーダの内面を分析、解説する picture で進められる。そして 章はフリーダとジェレス夫人の会話による scene である

が、 章の scene と重ね合わせてみると、大きな意味をもつように仕掛けられている。まず冒頭でフリーダは “His errand was perfectly simple: he came to demand that you shall pack everything straight up again and send it back as fast as the railway will carry it.” (110) と、オウエンのニュアンスを折り込まない言い方で報告する。読者は先の scene でオウエンの表現したニュアンスとそれを理解して気持が高揚するフリーダを見てきているので、フリーダの報告は自分の利は考えずに、オウエンが紳士的な生き方をできるように念じたものであることが理解できる。またジェレス夫人は結婚式の日取りについても聞かすが、フリーダは “I haven't the least idea.” (118) と答える。不思議に思った夫人が問い正すと、“He told me nothing whatever. He didn't touch on the subject.” と言い、さらに夫人から、“You haven't the notion they're waiting for the things?” と問われると、“How should I have? I'm not in their counsels.” (120) と逃れる。 章の scene がまだ記憶に新しい読者にはフリーダが嘘をついていることは一目瞭然である。こうして「ノート」に記されていた、モザイクを 1 片、1 片はめていくように scene を積み重ねていくジェームズの手法は無駄なく、人物像の深い陰影まで作り出していけるのである。

4 . Key scenes: その 2 , 章

物語の後半でジェームズが最も重要と考えるのは、ロンドンの父の家でのフリーダとオウエンの情熱の高まる scene であることが、すでにみたように、2 度にわたる「ノート」の記述（5 番目、6 番目）から明らかである。ジェームズが慎重に検討を重ねたこれら二つの scene は小説の 章、章で展開される。

最初の scene はオウエンが Ricks でフリーダとの会見の後、母との交渉の結果を待っていたが、音沙汰ないので、母から聞いた住所に、フリーダを訪ねてきた場面である。二人で会話を続けるうちに、結婚式は延期されていることをフリーダがジェレス夫人には話していないことをオウエンは知る。

ジェームズの 'scenic method' は scene と picture の組み合わせからなっ

ていることはすでに述べたが、舞台上で演じられるように展開される会話による scene と、その状況や、話者の心理状態、背景などについての説明である picture とが、うまく噛み合ってはじめて相乗効果を生み出す。モナとは10日間も会っていないことを話し、“If she does break will mother come round?”とオウエンから尋ねられたフリーダの複雑な心情についての叙述は彼女のめくるめく心の動きを見事に追っていく。そして読者は“*Yes, if your marriage really drops she'll give up everything she has taken.*” (159) とオウエンに伝えることが彼女の到達した結論であることを知るのである。それを聞いたオウエンは“*That's just what makes Mona hesitate!*”と言う。さらにオウエンの言葉を通して、モナがそんなにも蒐集品にこだわるのは章でもみたように、蒐集品の価値を認めるからではなく、自分のものにしたいからであること、それらを入手できないなら、オウエンも必要ないと言っているらしいことがわかる。章、章でモナが Poynton を訪れた際のジェレス夫人の態度を目撃しているフリーダにはモナの気持も理解できるのだ。読者も同様である。

またオウエンの“*She abused you and I defended you. She denounced you*” (164) という言葉から、モナがフリーダに対して嫉妬心を抱いて、オウエンを責めているらしいこともわかる。こうしてモナとの関係の修羅場を話していくうちに、我慢できなくなったようにオウエンはフリーダへの愛を告白し、同時にモナを非難する。

“*As I saw you and noticed you more, as I knew you better and better, I felt less and less I couldn't help it about anything or any one else. I wished I had known you sooner I knew I should have liked you better than any one in the world. But it wasn't you who made the difference,*” he eagerly continued, “*and I was awfully determined to stick to Mona to the death. It was she herself who made it...*” (166)

彼はさらに言葉を続けて、“*You ask me if I don't love her....But you ask*

it at the very moment I'm half-mad to say to you that there's only one person on the whole earth I *really* love, and that that person ” (167) と言いかかったところへブリッグストック夫人が入ってきて、この scene は終わる。

こうして情熱の高まりを不完全燃焼で中断したオウエンとフリーダだが、二人の親密な様子はブリッグストック夫人の目にしっかりと焼き付けられたことが、会話はほとんどはさまず、narration で進められる次の 章でわかる。夫人は部屋にティーセットが乱雑においてあり、ピスケットの破片が床に落ちているのを見て、二人が遠慮のいらぬ関係であるという印象を強く受けたい。さらに互いをかばいあう二人の様子は夫人の印象をさらに確信へと導いていったらしいことがわかる。フリーダに不愉快な思いをさせたくないオウエンに促されるようにして、夫人は出ていく。しかし別れ際に、二人が長い間無言でじっと見詰めあったときに、フリーダの目にそれまでオウエンが見たこともない色を見たという描写は次の scene を予測させるものである。

「ノート」には枚数の関係でブリッグストック夫人についての 章は簡潔にする必要があり、会話を交えない語りだけの章にせざるを得なかったことが記されている。しかし、そうであっても、ブリッグストック夫人の登場を入れたことはオウエンとフリーダに互いの気持を確かめ合う機会を与え、しかも、モナが母親から二人の親密な様子を聞いたなら、きっと婚約を破棄するだろうと二人に感じさせることになり、次の passion の scene へと導くために、きわめて有効である。同時に夫人の出現によって、二人はオウエンの置かれている立場、つまり、まだモナの婚約者であるという現実を直視せざるを得ないことも確かである。これらの背景があって、 章の scene はより複雑な陰影をもったものとなる。さらに夫人がオウエンと別れた後、どこへ行ったのかは定かではないことにも、その後の展開が予測できない含みをもたせることになる。

ジェームズは「ノート」に、なるべく作者が介入せずに、できるだけ劇のように直接的に展開を読者に示す必要性を強調しているが、その意図を反映

させて、 章はほとんどオウエンとフリーダの会話で進められる。姉マギーのもとへ移動したフリーダをオウエンが訪ねてきて、前日のブリッグストック夫人との会見の様話を話す。夫人はオウエンがフリーダと恋愛関係にあると決めつけ、強く非難したという。オウエンはあくまで冷静なフリーダに対して辛抱しきれないように、“...you shine like an angel, it doesn't bring you an inch nearer to saying what I want you to say,” と言い、身を乗り出して、“What I want you to say is that you like me what I want you to say is that you pity me.” と迫り、さらには “I want you to marry me.” (186) と求婚する。しかしオウエンの言葉を追っていくと、いかにも自己本位の解釈であり、肝心のモナとの決着は何もついていないことがわかる。フリーダは状況を察知するがゆえにたじろぐが、それでも耐え切れないようにオウエンの腕の中に身をゆだね、愛を告白する。ストイックなフリーダの激情の場面は、やはりブリッグストック夫人の登場があってこそ、納得できるものである。一つにはそれがモナの婚約破棄につながる可能性を彼女に感じさせたからであり、もう一つは夫人から、あたかも「悪い女」であるかのように扱われた屈辱のやりきれなさがあるからである。

“It is their hour of illusion it is their fool's paradise.” (160) とジェイムズが「ノート」に書いているように、二人は幸せな瞬間の向こうに現実を見ざるを得ない。フリーダは冷静になると、“Everything must come from Mona, and if it doesn't come we've said entirely too much. You must leave me alone for ever.” (192) と言って、モナとの関係を決着させることが先決であることを主張する。批評家ケネス・グラハム (Kenneth Graham) は、これはいわばフリーダの賭けであり、‘real activity’であって、フリーダが終始何も行動しないわけではないことの証明であるとみている。(143) モナから婚約破棄の手紙が来るはずと待っているオウエンだが、まだその手紙は届いていない状態なので、威勢のいいことを言いながらも、彼の表情は暗い。こうして passion の scene はその後の展開に不穏な予兆を示して閉じることになる。

ジェイムズが2度にわたり「ノート」に丹念に構想を記述したこれら二つ

の scene は間にブリッグストック夫人登場の narrative の章を入れることにより、会話だけではわからない二人の、とくにフリーダの心の動きが説得力のあるものになっていることがわかる。

5. フリーダの内面のドラマとしての結末

ジェームズの 'scenic method' が有効に生かされた 章はまさにこの小説の climax であり、そこから急速に物語は収束していく。「ノート」の7番目の記述にあるとおり、ジェームズはこのプロセスをジェレス夫人とフリーダとの会話で展開させる。読者は 章の scene で、オウエンとフリーダの情熱の高まりのなかにも、危うい未来が予測されたことを印象に残しているし、さらに二人の親密な様子を目にしたブリッグストック夫人のその後の足取りは不明のままなので、フリーダの不安な心に共感しながら、成り行きを見守ることになる。

ジェレス夫人の招きによってロンドンのホテルに夫人訪ねたフリーダは、ブリッグストック夫人がマギーの家を出た後、ジェレス夫人を訪ねていたことをはじめて知る。ジェレス夫人はブリッグストック夫人の話から、オウエンとフリーダが親密であることを確信し、名品をすべて送り返したという。それを聞いて "Everything?" (211) と泣き声をあげるフリーダを前にして、ジェレス夫人も状況の深刻さを瞬時に悟ったことが明らかである。こうして、この短い scene は緊迫感を高める。

ジェレス夫人が Poynton から名品を Ricks に運び出して以来、夫人に共感できなくなっていたフリーダだが、夫人が彼女を信頼して名品をすっかり送り返したことを知ると、再び夫人と心が通い合うようになる。現実を直視する二人の思考が同時進行していく様子が、淡々と続く会話による scene で提示される。淡々とした会話はそれだけ二人が各々事態の深刻さを認識し、それゆえに無力感に陥っていることを印象づけるのに効果的だ。

やがてオウエンとモナが遂に結婚したという知らせをフリーダはジェレス夫人から聞く。その事実は客観的にみれば、夫人とフリーダを結ぶ絆は何もなくなったことを意味するのだが、そうではなく、むしろ二人の絆をいっそ

う強めるものであることが、次に引用する会話と説明文との絶妙な組み合わせによって描き出される。

“We’re together, we’re together,” said Mrs. Gereth....To Freda, in the face of the event, it appeared that this was exactly what they were not: the last inch of common ground, the ground of their past intercourse, had fallen from under them. Yet what was still there was the grand style of her companion’s treatment of her. Mrs. Gereth couldn’t stand upon small questions, couldn’t in conduct make small differences. “You’re magnificent!” her young friend exclaimed. “There’s an extraordinary greatness in your generosity.” (238)

ジェレス夫人が、自分の意を理解し継承できるただ一人の人としてフリーダに何としても渡したかった名品は、フリーダが躊躇している間に、夫人が恐れていたモナの手中に収まってしまう結果となる。しかしそれでもなお、フリーダを排撃することなく、信頼して共に生きることを願う夫人の寛大さに、フリーダは崇高なものを感じるのである。

最終章における二人の会話ではモナが話題になる。夫人はオウエンがフリーダを愛しながら、強引なモナに屈して結婚してしまったと思い込んでいたので、彼ら二人が一緒に生活していることは理解できないと言う。それに対し、フリーダは“*Oh she has dispelled it.*”と言い、彼女の考えを述べる。

“...The case is simple and logical enough. She’s a person who’s upset by failure and who blossoms and expands with success. There was something she had set her heart upon, set her teeth about the house exactly as she had seen it”

“She never saw it at all, she never looked at it.” cried Mrs. Gereth.

“She doesn’t look with her eyes; she looks with her ears. In her own way she had taken it in; she knew, she felt when it had been touched.

That probably made her take an attitude that was extremely disagreeable. But the attitude lasted only while the reason for it lasted.”
(255)

この scene はモナが母親とともにジェレス夫人を Poynton に訪ねた 章を想起させる。美しい屋敷や調度品の数々を賞賛する美意識がないゆえに、「見ようとしなさい」モナをあからさまに軽蔑したジェレス夫人だったが、モナは自分が軽蔑されていることを理解できないほど愚かではないこと、それどころか、‘...her ignorance was obscurely active’ (26) であることを、そのときからフリーダは見抜いていたのだ。モナはだからこそ、執拗に spoils にこだわったのだろうが、それが手に入れられた今は本来のモナ、つまりオウエンが愛したモナに戻っているのかもしれない。一方、未だに、「モナは（Poynton の美を）見ようとしなかった」と断言するジェレス夫人はそれだけ受け入れがたい強い印象をモナから受けたのだろうことがわかる。その印象は夫人のモナを拒絶する姿勢をいっそう強め、一方、モナも無言で態度を硬化させて行ったことが納得できる。

このように、‘scenic method’ は一つの scene が時間の離れた scene を思い起こさせ、それと重ね合わせてみることで、物事の因果関係をはっきりさせる効果もある。また登場人物の変わらぬ性格や、物の見方の特徴も浮かびあがり、それらが action に深く関係していることが理解できるのである。

美しいものがあるべきところに落ち着いてこそ美しいと感じるフリーダは、名品が Poynton に戻ったことにより、むしろ心の平安を得ていた。だがオウエンから何か一つ、‘gem of the collection’ (258) を自分からのプレゼントとして受け取ってほしいという手紙を受け取ってからは、オウエンの真意を推測しては心が揺れ動いていた。ようやく意を決して、逸る心を抑えながら Poynton に向かった彼女は、予想もしなかった大火災で Poynton の屋敷が救いようもなく焼け落ちるのを目の前にして、呆然と立ちすくむ。結末を大火災とすることは「ノート」の 2 番目の記述にすでに記されていた。しかし、出来上がった小説は火災で終わってはいないことに注目したい。絶望

感に陥ったフリーダだが、“Poynton's gone?” と自分に言い聞かせるかのよ
うに、問いとも呟きともいえる言葉を発し、ポーターに次の列車の時刻を尋
ねて、プラットフォームに出るのである。“I'll go back” (266) という最後の
言葉はフリーダが Poynton にまつわるさまざまな思いを捨て、現実の社会
に戻っていくことを示している。フリーダの内面のドラマとして ‘scenic
method’ によって展開されてきたこの小説にふさわしい結末であり、劇作の
経験を生かすべく、この小説にかけたジェームズの意気込みが結実している
といえるだろう。

注

- (1) ジェームズは初演の3日後の1895年1月9日付けの兄ウィリアム宛の
手紙に、「私はこの劇をできるだけ低俗で、粗野で、単純で、わかりや
すい、一言で言えばイギリス的なものにしたが、それでもロンドンの
低俗な常習的に劇場通いをする観客には理解できないものだった」
(*Letters* , 508) と書いている。
- (2) 1895年1月23日付けの「ノート」に「私は古いペンを再び取り上げ
た……。今こそ私らしい仕事をするのだ」と書いている。
- (3) 本稿中の和訳はすべて拙訳
- (4) Oxford Dictionary の ‘action’ の項目の7番目に、‘the event or series
of events represented in a drama or forming the subject of a poem
or other composition’ とある。

引用文献

Baym, Nina. “Fleda Vetch and the Plot of *The Spoils of Poynton*.”
PMLA. 84. No.1, January, 1969.

Graham, Kenneth. *Henry James: The Drama of Fulfilment*. Oxford:
Clarendon Press, 1975.

James, Henry. *The Complete Notebooks of Henry James*. Ed. Leon Edel

- and Lyall H. Powers. New York: Oxford University Press, 1987.
- , *Letters* . Ed. Leon Edel. Cambridge: Harvard U. P., 1980.
- , *The Spoils of Poynton*. 1976. *The Novels and Tales of Henry James*. Vol. 10. New York: Augustus M. Kelly. A971. 26vols.
- Wiesenfarth, F. S. C., Joseph. *Henry James and the Dramatic Analogy*. New York: Fordam UP, 1963.